

第 55 回文化講座

# 発掘調査速報 2013 その 1

【日時】 8月 31 日 (土) 13:30 ~ 16:00

【会場】 沖縄県立埋蔵文化財センター 研修室

沖縄県立埋蔵文化財センター

第55回文化講座「発掘調査速報2013 その1」

平成25年8月31日（土）13時30分～16時00分

あいさつ 沖縄県立埋蔵文化財センター所長 下地 英輝

円覚寺跡発掘調査 13：35～14：05（30分） 金城 貴子……1

首里城跡発掘調査 14：05～13：35（30分） 新垣 力……6

◇◇◇◇◇◇ 休憩 14：35～14：50（15分） ◇◇◇◇◇◇

中城御殿跡発掘調査 14：50～15：20（30分） 羽方 誠……10

基地内文化財分布調査 15：20～15：50（30分） 大堀 皓平…15

◇◇◇◇◇◇ 質疑応答 15：50～16：00（10分） ◇◇◇◇◇◇

# 円覚寺跡発掘調査

沖縄県立埋蔵文化財センター

金城 貴子

所在地：那覇市首里当蔵 2-1

時代：グスク時代～近代

調査期間：平成 24 年（2012）7月 2 日～9月 28 日

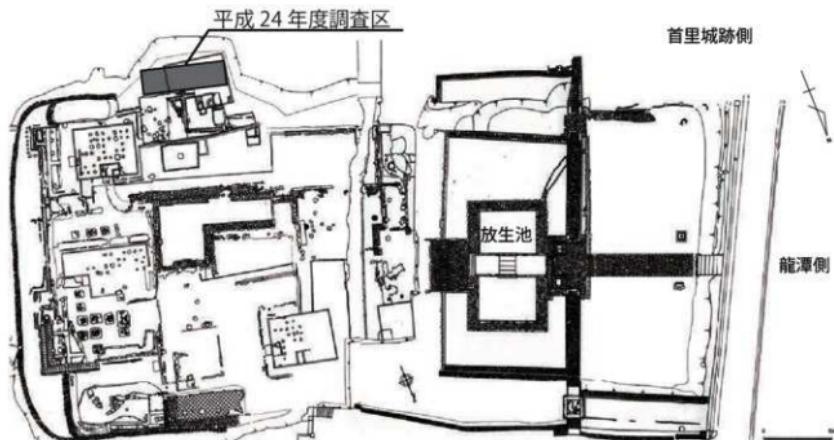
調査内容：円覚寺跡石牆復元整備に伴う遺構確認調査

## 1. はじめに

円覚寺とは 1492 年から約 3 年の歳月を経て建造された臨済宗の寺院である。その創建については、尚真王（第二尚氏王統第三代）が、父親である尚円王の御靈を祀るために建立されたと伝えられる。現在は国の史跡に指定されている。

## 2. これまでの経過

円覚寺の境内に存在した建造物は、沖縄戦によって焼失したが、往時の姿を復元することを目的に、平成 9 年から平成 13 年までの 5 か年間、遺構確認調査が実施された。その調査成果などに基づき、翌年から円覚寺跡の外周を取り囲む石牆の復元整備を実施してきた。平成 19 年度からは、前回未調査部分の遺構調査に着手し、その成果をうけて現在も引き続き復元整備が行われている。



第 1 図 平成 24 年度発掘調査実施箇所

### 3、平成 24 年度の調査成果

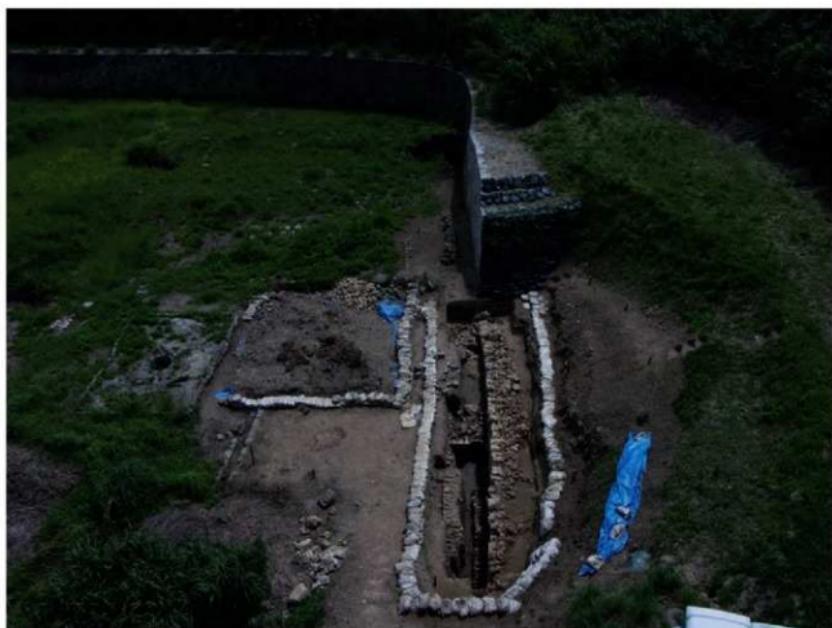
平成 24 年度の調査は、南側石牆の復元整備予定範囲における根石確認を目的として発掘調査を行った。調査の結果、石牆とその根石を確認することができた。その他にも、戦前まであったと考えられる円覚寺跡の遺構や、旧琉球大学に関係すると考えられる遺構なども見つかった。以下に新しい遺構から概要を述べていく。

#### ① 旧琉球大学に関係すると考えられる遺構

調査区東側にて、北側及び西側に面を持つ石列を検出した。この石列がのっている土からはガラス片や現代の鉄釘なども見つかったことから、かなり新しい時期に造られたものと考えられる。そのため、旧琉球大学に関係する何らかの遺構の可能性が考えられる。

#### ② 戦前まで残存していたと考えられる円覚寺跡の遺構

調査区西側にて、方形状の遺構を検出した。この遺構は、平成 22 年度の調査の際に確認されていたものであるが、遺構の一部が今年度の調査範囲にかかっていたため、再検出となった。今年度も遺構の輪郭を出す程度の掘削に留めたため、詳細については今後の調査によりたい。



石牆検出状況

### ③石牆（写真1）、石敷遺構（写真2）、石積み（写真3）、石列（写真5）

石牆とその根石を確認した。石灰岩の切石を用いた相方積みで、根石をクチャの地山直上に据えて立ち上げている箇所と、造成土に根石を据えて立ち上げている箇所が確認できた。また、石牆を観察すると、石の積み方の違いを確認できる箇所が数箇所みられた。これらのことから、何度か修復もしくは拡張工事等が行われた様相をうかがい知る事ができた。さらに裏込め石にも注目すると、東側は裏込め石が密に入っていて、石牆の幅も大きい。しかし、西側へ向うにつれて、裏込め石が小さくなり、石牆の幅も細くなっているという違いもみられた。

今回の調査では、石牆以外に石敷遺構や石積み、石列を確認することができた。まず、石敷遺構については、調査区の東側にて石牆の前面に広がる状況を確認できた。機能については、排水を考慮したものではないかと考えられる。

また、石積みについては、石牆に直交するように確認された。20～30cm大の石灰岩を3段積んでいる。南北方向に延び、西側に面をもつ。また、天端も意識して面取りされている。

続いて石列については、調査区西側にて石牆の根石の前面にて確認された。東西方向に延び、北側に面をもつ。裏込め石も伴っている。石列を伴う石牆は、しまりの弱い造成土上に根石を据えて立ち上げている状況を踏まえると、石牆を補強するためのものと考えられる。

次に遺物については、中国産陶磁器、本土産陶磁器、沖縄産施釉陶器や無釉陶器、瓦、塼、錢貨などが出土した。特に多いのが瓦や塼である。円覚寺跡の創建年代（15世紀末～16世紀初）に一致する遺物はほとんどみられず、主に17～18世紀代の陶磁器が多かった。この遺物が集中する層より下位に、石牆や石敷遺構、石積み、石列の造成土がある。このような状況より、今回確認された石牆の他、石敷遺構、下部の石積み、石列は近世に築かれたものか、あるいは近世期にはすでに築かれていたと考えられる。

## 4. おわりに

今回の調査では、様々な成果を得ることができた。古写真などの資料がほとんどない本地区における石牆の残存状況を確認することができたことは重要であると考える。



写真1 検出された石牆



写真2 石牆及び石牆遺構



写真3 石積み



写真4 石列

# 首里城跡発掘調査（御内原東地区・御内原北東地区・東のアザナ北地区）

沖縄県立埋蔵文化財センター

新垣 力

場所：那覇市首里当蔵町3丁目1番（国営沖縄記念公園首里城地区）

目的：首里城復元整備に伴う遺構確認調査

期間：平成24（2012）年7月2日～平成25（2013）年3月28日

面積：約800m<sup>2</sup>

時代：16世紀～20世紀（ゲスク時代～近代）

## 調査成果

### 1. 御内原東地区

○落ち込み（内郭城壁に隣接し、石積みと石列で構築）。16世紀後半頃の廃棄遺構か。

○「金蔵」東側に位置する遺構群（石積み・階段・区画など）

※石積み：相方積みで表面に漆喰を塗布した痕跡が残る。

※階段：石積み構造のもの（北側）と琉球石灰岩の岩盤を加工したもの（南側）がある。

後者は白銀門への通路の一部と考えられる。

※区画：北側階段に隣接。18世紀前半頃の廃棄遺構か。

### 2. 御内原北東地区

○内郭城壁とそれに伴う階段及び通路、また土留め用の石積みを検出。

※内郭城壁：平面形が「Z」状になる場所で、内面部分に積み直しの痕跡が残る。

※階段及び通路：石造りのいわゆる琉球式階段。通路は石畳道。

※土留め石積み：粗加工の石材を用いて野面積みで構築。

○方形石組み：近代の廃棄遺構か。

### 3. 東のアザナ北地区

○開口部全体を石積み（出入口1ヶ所と空気孔2ヶ所あり）で塞いだ洞穴。内部の床面は北側に石粉、南側に石敷きを施している。伝承では、御内原の女官達が非常時に避難した「ウシヌジガマ」とされる。

○細粒砂岩（ニービ）の岩盤を掘り込んだ避難壕。沖縄県師範学校の生徒が構築・使用した「留魂壕」の一部と考えられる。

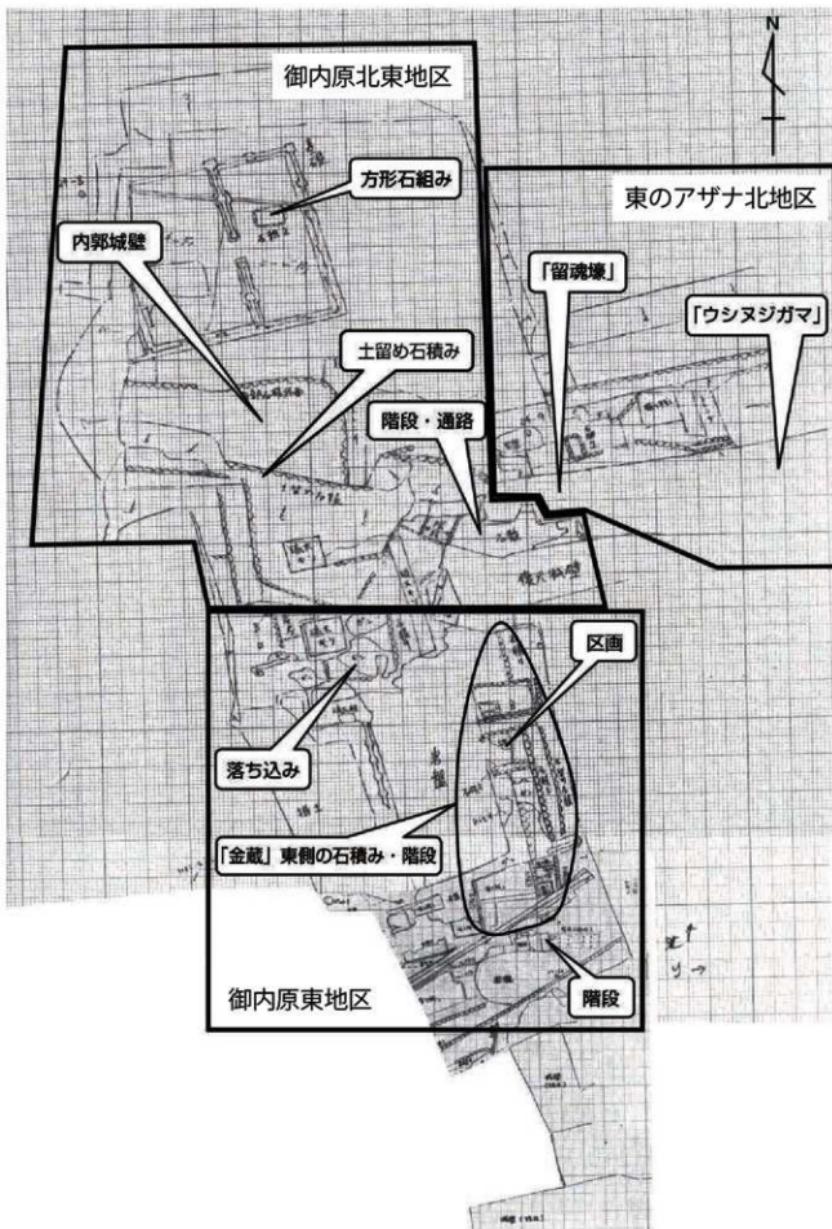
### 4. 遺物

○陶器類：産地は中国・朝鮮・東南アジア・日本・沖縄など。特に中国清代の官窯製品、日本産の人形や統制磁器、沖縄産？の瓦製欄干が注目される。

○金属製品：鉄製品（槍の穂先）、青銅製品（銭貨・飾り金具）など

○自然遺物：獸魚骨や貝殻など

○その他：漆製品（中国産？の合子）、石製品（装飾品）、骨製品、布製品など





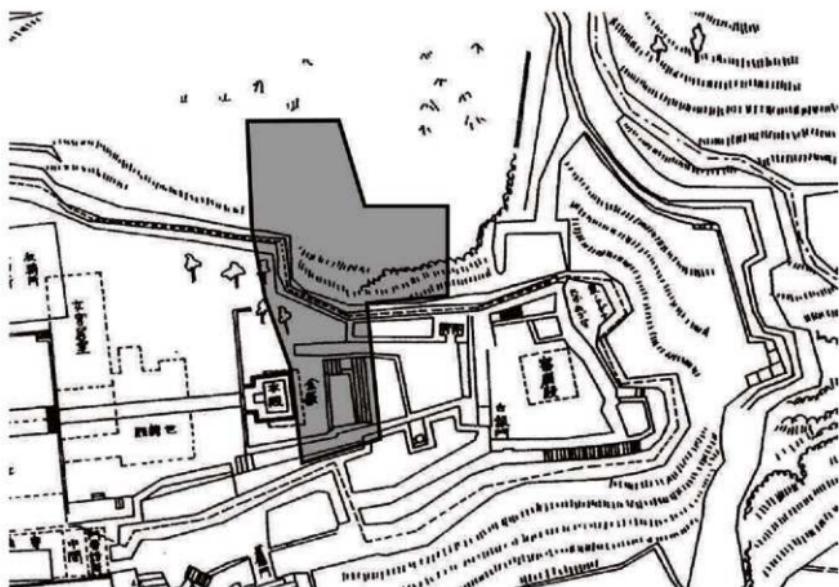
①「首里城絵図（17世紀後半～18世紀初頭作成）」にみる平成24年度調査範囲



②「首里古地図（18世紀初頭作成）」にみる平成24年度調査範囲



③「沖縄県首里旧城図（明治初期頃作成）」にみる平成 24 年度調査範囲



④「旧首里城図（昭和 6 年頃作成）」にみる平成 24 年度調査範囲

# 中城御殿跡発掘調査

沖縄県立埋蔵文化財センター

羽方 誠

所在地：那覇市首里大中町 1-1

時代：近世～近代

調査期間：平成 24（2012）年 9月 1 日～平成 25（2013）年 2月 28 日

調査面積：350m<sup>2</sup>

## 中城御殿の歴史

中城御殿は、次の琉球国王となる世子が暮らした邸宅である。当初その建物は、17世紀前半に首里真和志町（首里高等学校敷地内）に創建された。その後、1875（明治 8）年に首里大中町（旧県立博物館の敷地）に移転し、1945 年の沖縄戦で破壊されるまで存在していた。今回調査の対象としたのは、移転後の中城御殿である。

## 調査成果

平成 24 年度の調査では、7 か所にトレントを設け合計 350m<sup>2</sup>の面積で発掘調査を実施した。

トレント 1 では、旧県立博物館の工事が地山（石灰岩）まで達していて、中城御殿の遺構は残っていないことがわかった。

トレント 2 では、石敷き、石組み、石積みや溝などが見つかった。かつて女中部屋や便所があった場所である。

トレント 3・4 では、当時の遺構は残っておらず、地山（クチャやニーピ）を確認した。

トレント 5 では、<sup>せきしろう</sup>石牆の根石を確認した。中城御殿の周囲を囲んでいた石牆は大きな石が多く使われていて、また直線や扇形の曲線をうまく組み合わせて積んでいる。表面も平らに整形されていて、見た目を意識したデザインとなっている。

その中でも根石の大きさは比較的小さく、表面には凹凸が残り、形もシンプルな長方形が多い。

トレント 6 では土留めの石積みや造成層を確認した。

トレント 7 では、石積みが見つかった。これは中城 大親という建物の南側にあった、瓦石垣に相当する。

各トレントからは、屋根瓦や陶磁器、金属製品、動物や魚の骨などが出土した。



中城御殿跡 間取り図、トレンチ配置図

西暦	元号	事項
1621～40	尚豊王代	尚豊王代 中城御殿が現県立首里高校の地に建設される
1870年	尚泰23/明治3年	中城御殿が龍潭北側に新しく造営されることが決まる
1875年	尚泰28/明治8年	世子・中城王子が新築された屋敷に移る
1879年	尚泰32/明治12年	廃藩置県 首里城を明け渡し尚泰王以下中城御殿に移る
1884年	明治17年	中城御殿ほか21ヶ所の敷地・建物など尚泰の私有財産と確定される
1945年	昭和20年	3月下旬 宝物を3つの大金庫へ移す
		4月6日頃 中城御殿が米軍の砲撃をあびて炎上
		4月8日頃 火災をのがれた御後絵(肖像画)を御嶽岩の後ろに移す
		4月10日頃 日本軍が殿を機関銃陣地にする(上之御殿、防空壕など)
		戦後 一時引き揚げ者のパラックが建つ
1950年	昭和25年	1月 首里市役所が中城御殿跡に移転する
		7月 首里市営バスが営業所を同敷地内に設置する(～66年まで)
1954年	昭和29年	首里市が那覇市に合併され首里市役所が首里支所となる
1965年	昭和40年	琉球政府が敷地購入
1966年	昭和41年	首里支所が当蔵に移転 首里バス(1951年に民営化)が当蔵へ移転 10月 米国援助により新敷地に鉄筋コンクリート建の新館を建設 龍潭池畔にあった「琉球政府立博物館」が移転 11月に開館
1972年	昭和47年	5月 日本復帰にともない「沖縄県立博物館」と改称する
1991年	平成3年	県立博物館による石牆部分の第1次発掘調査実施
1992年	平成4年	県立博物館による石牆部分の第2次発掘調査実施
1994年	平成6年	県立博物館による石牆部分の第3次発掘調査実施
2006年	平成18年	3月 沖縄県立博物館が新館移転(おもろまち)のため休館
2007年	平成19年	県立埋蔵文化財センターによる調査開始

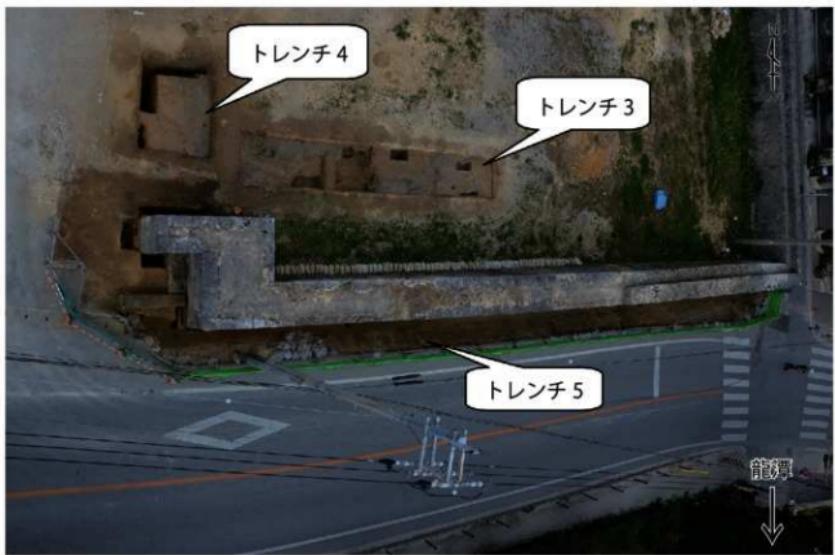
中城御殿跡関連年表



トレンチ 1・2



トレンチ 2 (上が北)



トレンチ3～5



トレンチ5と石牆（東から）



トレンチ 6・7



トレンチ 7 (北から)

# 基地内文化財分布調査（大山加良当原第四遺跡確認調査）

沖縄県立埋蔵文化財センター

大堀 皓平

## 1 基地内文化財分布調査の概要

### 目的

沖縄県内の米軍基地や自衛隊基地内にある埋蔵文化財（＝遺跡）の範囲や性格を把握  
→ 遺跡分布地図など、文化財保護のための基礎となる資料を作成するため。

### これまでの経過

平成 9年度 文化庁の国庫補助事業としてスタート。

平成 11年度 返還決定をうけて、特に面積が広く緊急性が高い普天間飛行場内で試掘調査を開始する。

平成 13年度 宜野湾市教育委員会が参加。分担して調査を行うようになる。

平成 20年度 重要施設や滑走路などの調査不可能エリアを除いた普天間飛行場内の約3～4割の面積について試掘調査をほぼ完了、確認調査へ移行。

平成 21年度 それまでの調査成果をまとめた『普天間飛行場内遺跡地図（中間報告）』を刊行。

平成 22年度 大山加良当原（おおやまかららーばる）第四遺跡の確認調査を開始。

## 2 これまでの大山加良当原第四遺跡の発掘調査

### 大山加良当原第四遺跡とは

- ・平成 19 年度に当センターの試掘調査によって発見された（図 1）。
- ・1945 年米軍撮影の航空写真では畑が広がる耕作地帯（図 2）。
- ・現代の表土層、戦後の造成土層、近世・近代の耕作土層、グスク時代の層、縄文時代の層の 5 つの時代の地層が確認された。  
うえはらぬーりばる
- ・特に縄文時代の層の土は、上原 濡原遺跡（図 1）の土に類似する。この遺跡からは縄文時代晚期の畝間状遺構が検出され、農耕（畝作）の可能性を示唆する上で重要（宜野湾市教育委員会 1995）。

→ 大山加良当原第四遺跡にも縄文時代の層から同様の遺構が検出される可能性。

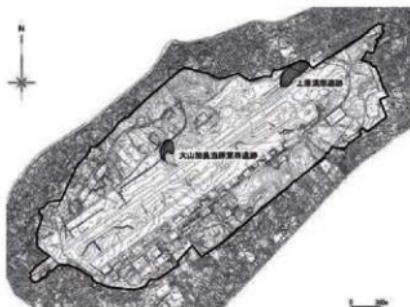


図1 大山加良当原第四遺跡と上原満原遺跡の位置関係



図2 1945年の加良当原（宣野湾市教育委員会 2012）

### これまでの調査成果

近世・近代：溝状遺構2基（写真1）、遺物廃棄土坑など。

グスク時代：溝状遺構 ※遺物の出土なし

弥生～平安並行時代：焼土面（写真2）

縄文時代：土器片や石斧、遠隔地石材などがまばらに出土。



写真1 3トレンチ  
III層（近世・近代）検出の遺構（H 23年度）



写真2 3トレンチ  
IV層（弥生～平安並行時代後葉）検出の焼土面（H 23年度）

## 3 平成24年度の調査成果

### 3トレンチ（図3）

- 幅2m外側に拡張、この年度は拡張部を調査。

- 北東の端から土坑や溝状遺構が検出（写真3）。遺物は近代のものがほとんどだが、遺構直下から土器片が1点出土。

- 西側からは遺構検出されず。遺物も出なくなったので一部を機械掘削したが、4mまで何も見つからず同じ地層が続くことを確認。（写真4）

### 2トレンチ（図3）

- 2トレンチの東側で、およそ50点の縄文土器が出土。（写真5・6）

- 土器のほかに遠隔地の石材（砂岩）が2点出土。（写真7）

- 土器は2・3トレンチで出土位置がほぼ水平で、まとまりをもつ。（図4）

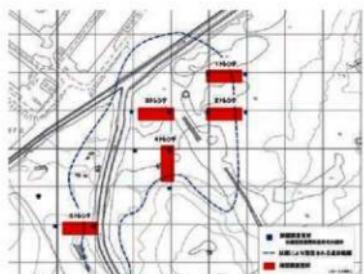


図3 大山加良当原遺跡 トレンチ設定図



写真2 3トレンチ 北東端検出の遺構



写真4 3トレンチ サブトレンチ東側壁面



写真5 2トレンチ 土器出土状況遠景



写真6 2トレンチ 土器出土状況近景



写真7 2トレンチ 石材出土状況

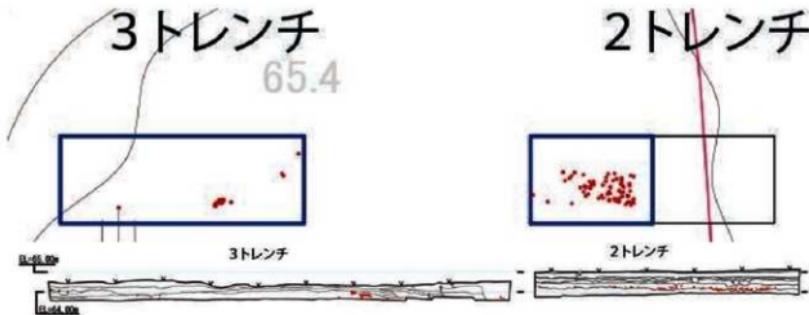


図4 土器の出土位置

#### 4 理化学分析の成果

年代

- 平成 23 年度に検出された焼土面が、約 1200 年前のものであることが判明（表 1）
- また 2 トレンチの地層中の炭化物から年代を測定した結果、近世・近代の層は約 400 年前、グスク時代の層は約 800 ~ 1200 年前、縄文時代後期・晚期の地層が約 2500 年前と計測された。（表 2、写真 8）

番号	遺構名	層位	種類	補正年代 BP	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	測定年代 BP	Code No.
①-1	焼土集中	IV 層	炭化材	1,090 ± 20	-30.01 ± 0.44	1,170 ± 20	IAAA-123185
①-2	焼土集中	IV 層	炭化材	1,100 ± 20	-29.54 ± 0.27	1,180 ± 20	IAAA-123186
②	溝状遺構	IV 層	—	—	—	—	—
③-1	土器・石器出土地点	V 層	—	—	—	—	—
③-2	土器・石器出土地点	V 層	—	—	—	—	—

1) 年代値の算出には、Libby の半減期 5,568 年を使用。

2) BP 年代値は、1950 年を基点として何年前であるかを示す。

3) 付記した誤差は、測定誤差  $\sigma$  (測定値の 68% が入る範囲) を年代値に換算した値。

表 1 放射性炭素年代測定値 (3 トレンチ)

試料番号	試料の質	採取層位	補正年代 BP	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	測定年代 BP	Code No.
1	炭化物	3-1 層	410 ± 20	-12.65 ± 0.44	200 ± 20	IAAA-130110
2	炭化物	3-2 層	1,010 ± 30	-15.14 ± 0.39	850 ± 30	IAAA-130111
3	炭化物	4 層	1,150 ± 30	-26.21 ± 0.43	1,170 ± 30	IAAA-130112
4	炭化物	5 層	1,440 ± 20	-23.91 ± 0.51	1,420 ± 20	IAAA-130113
5	炭化物	6-2 層	1,810 ± 20	-27.61 ± 0.46	1,850 ± 20	IAAA-130114
6	炭化物	6-2 層	2,510 ± 30	-29.56 ± 0.28	2,590 ± 30	IAAA-130115

1) 年代値の算出には、Libby の半減期 5,568 年を使用。

2) BP 年代値は、1950 年を基点として何年前であるかを示す。

3) 付記した誤差は、測定誤差  $\sigma$  (測定値の 68% が入る範囲) を年代値に換算した値。

表 2 放射性炭素年代測定値 (2 トレンチ)



写真 8 2 トレンチ 南側壁面

## 土器や石材の供給源

- ・大山加良当原第四遺跡で出土した土器について、土器の型式や素材の土（胎土）の産地を明らかにするため、専門業者に依頼して胎土分析を実施。
- ・比較のため、過去に調査された大謝名軍花原第一遺跡、大山富盛原第二遺跡、喜友名貝塚・グスクで出土した土器も試料とした。（図5、写真9）
- ・胎土分析の結果から、喜友名貝塚・グスク出土の試料7を除き、沖縄本島中北部にある名護層の石片が含まれていることが分かった。（表3・4）試料7が異なるのは、この試料だけ異なる型式であること（この試料のみ縄文時代後期ごろの大山式、残りは縄文時代晚期後半ごろの宇佐浜式もしくは仲原式）が要因に挙げられる。
- ・この結果から、縄文時代晚期ごろの普天間飛行場周辺の遺跡から出土する土器は、同じような胎土を使って土器作りをしていたことを窺わせる。
- ・石器石材も同じく本島中北部や慶良間諸島に分布する名護層やそれに類似する地層にみられる砂岩や緑色片岩。
- ・これらの成果から、土器の土や石器石材は上記の4遺跡でほぼ共通の獲得地（名護層の分布範囲とそれらを通る河川の流域）まで往来していたとみられる（図6）。このことは、比較的同一の集団が縄文時代晚期頃に居住し、普天間飛行場の周辺に遺跡を形成していた可能性をうかがわせる。

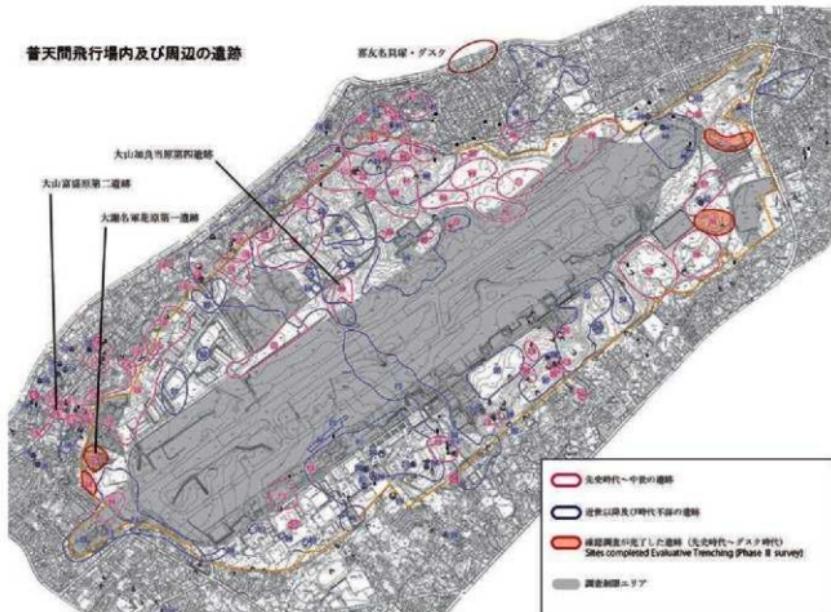
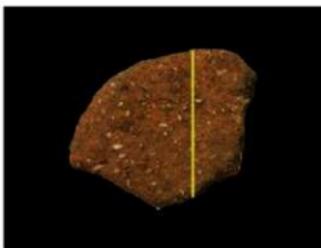


図5 土器胎土分析試料の出土した遺跡



No. 01 H16基地内  
大謝名軍花原第一遺跡A地区



No. 05 基地内IV  
大山富盛原第二遺跡B1区1類



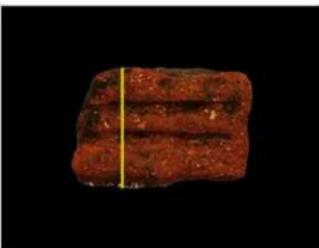
No. 02 H23基地内  
大山加良当原第四遺跡



No. 06 基地内IV  
大山富盛原第二遺跡B1区3類



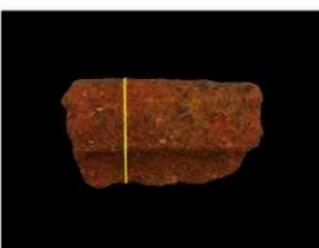
No. 03 H24基地内  
大山加良当原第四遺跡6-2層2トレP-12



No. 07 喜友名貝塚・グスク有文脇部6類b

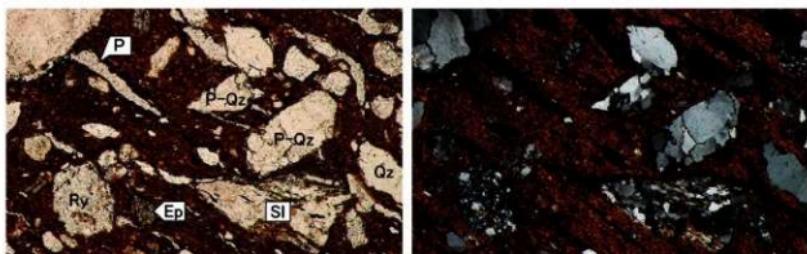


No. 04 H24基地内  
大山加良当原第四遺跡6-2層2トレP-17

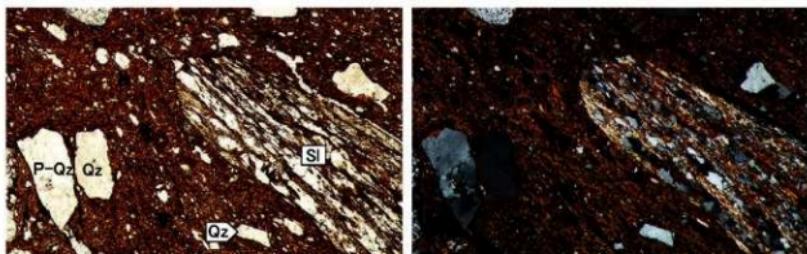


No. 08 喜友名貝塚・グスク3類無文a

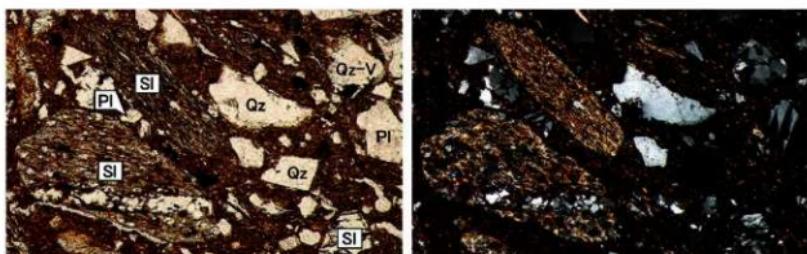
写真9 土器胎土分析に用いた試料（線は分析のための切断箇所）



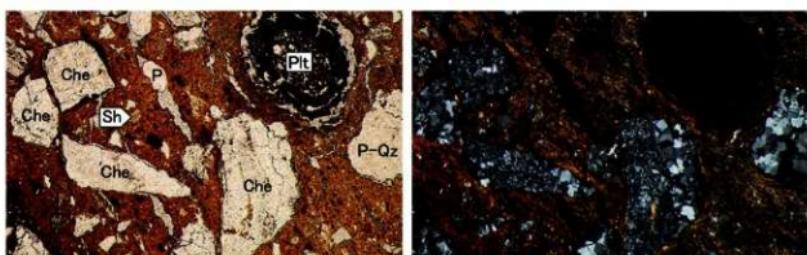
1. 試料番号3(大山加良当原第四遺跡 H24基地内6-2層2トレP-12 2013.2.28)



2. 試料番号4(大山加良当原第四遺跡 H24基地内6-2層2トレP-17 2013.2.28)



3. 試料番号6(大山富盛原第二遺跡 基地内IV大山B1区3類IVa層)



4. 試料番号7(喜友名貝塚・グスク有文洞部6類・キユナE10-2層5/10)

Qz:石英. Pl:斜長石. Ep:綠レン石. Che:チャート. Sh:頁岩. Ry:流紋岩.

P-Qz:多結晶石英. Sl:粘板岩. Qz-V:脈石英. Plt:植物片. P:孔隙.

写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。

写真 10 頸微鏡で見た土器胎土

0.5mm

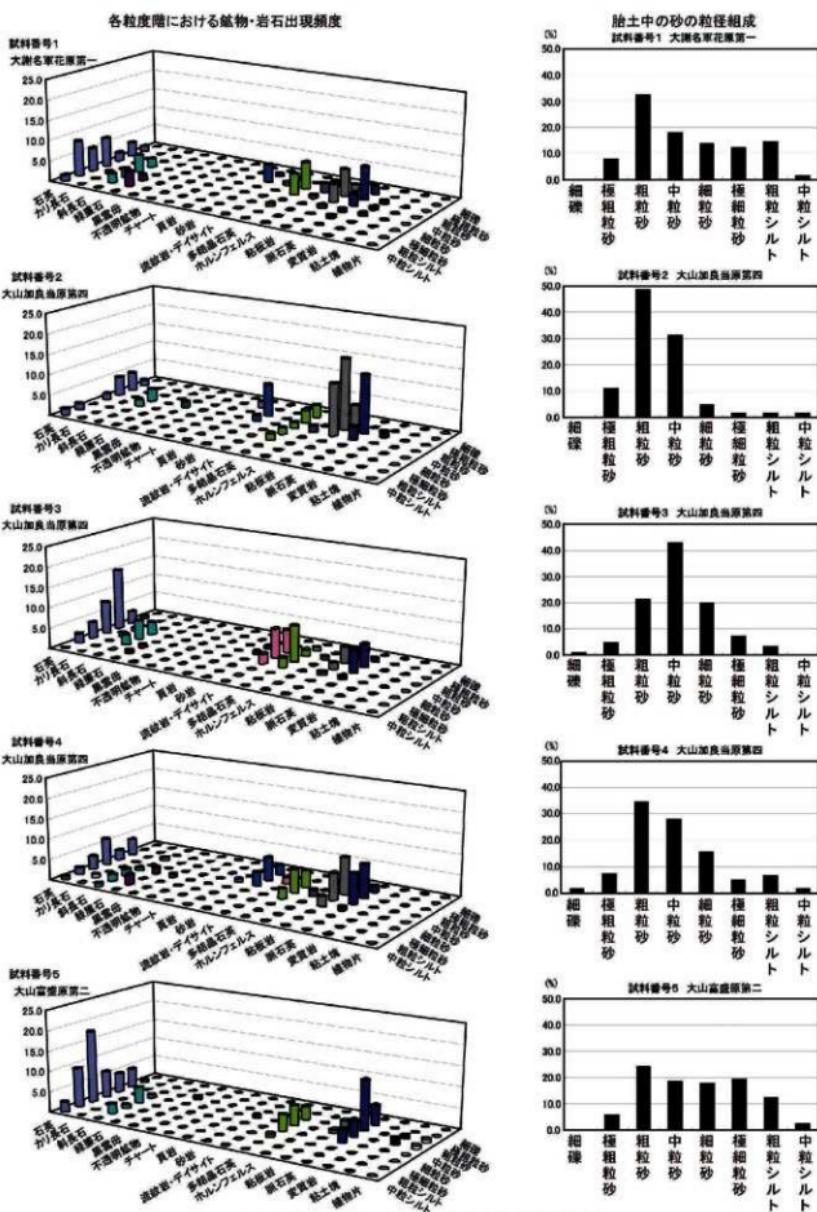


表3 土器胎土中の鉱物・岩石と粒径1

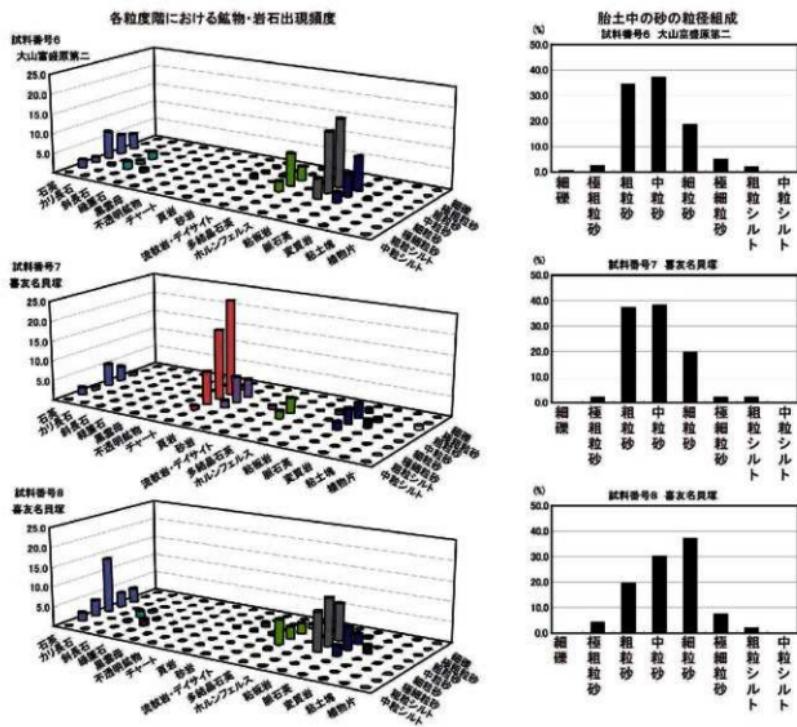


表4 土器胎土中の鉱物・岩石と粒径2

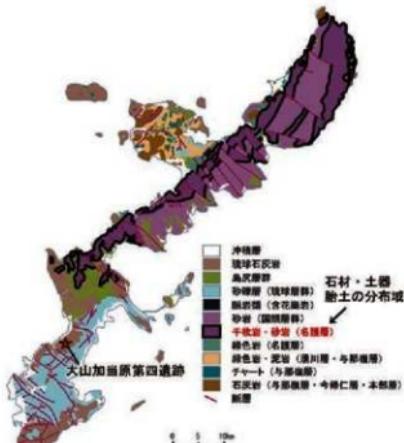


図6 土器胎土分析・石器石材から想定される行動範囲

## 5 まとめと課題

- ・大山加良当原第四遺跡は、縄文時代晚期、弥生～平安並行時代後半からグスク時代初頭、近世・近代の時期にまたがる遺跡であることが分かってきた。
- ・近世・近代の頃は生産遺跡（耕作地）の性格を示す。一方でグスク時代や縄文時代は、住居跡などがないことから集落ではないようである。しかし情報が乏しく現時点で性格を特定するのは難しい。
- ・縄文時代の大山加良当原第四遺跡の土器胎土・石器石材は、普天間飛行場周辺の同時代遺跡のものと同じであり、遺跡を形成した人々は同一もしくは近しい集団であった可能性が挙げられる。
- ・確認調査は調査期間が限られていたこともあり、今年度に継続された。現地での調査に加え、遺跡やそれを形成した当時の人々の性格を把握するための調査研究を継続していく予定である。

### 参考文献

- 宜野湾市教育委員会 1995 『上原瀧原遺跡発掘調査記録—普天間飛行場基地内陸軍送油管新設工事に係る緊急発掘調査一』 宜野湾市文化財保護資料第43集
- 宜野湾市教育委員会 2012 『大山前門原第一遺跡—平成21・22年度個人住宅建設に係る第2次～第4次緊急発掘調査一』 宜野湾市文化財調査報告書 第49集

# 行事予定のご案内

## 文化講座

入場無料・定員 140 名 会場：当センター研修室

### 第 56 回文化講座 発掘調査速報 その 2

平成 25 年 9 月 21 日（土）13：30～16：00（13：00 開場）

- ① 海軍病院建設予定地内発掘調査（宜野湾市）
- ② 県内遺跡詳細分布調査（渡嘉敷村他）
- ③ 戦争遺跡詳細確認調査（県内各地）
- ④ 白保竿根田原洞穴遺跡確認調査（石垣島）

## 企画展

重要文化財公開

### 首里城京の内跡出土品展

平成 25 年 11 月 1 日（金）～26 年 3 月 23 日（日）

## 沖縄県立埋蔵文化財センター

〒903-0125 沖縄県中頭郡西原町字上原 193-7（琉球大学附属病院横）

TEL 098-835-8752

FAX 098-835-8754

HP <http://pref.okinawa.jp/edu>

●開所時間 午前 9 時～午後 5 時まで（入所は午後 4 時 30 分まで）

●休 所 日 毎週月曜日、国民の休日（こどもの日、文化の日を除く）

年末年始（12 月 28 日～1 月 4 日）、慰霊の日（6 月 23 日）

※祝日と月曜日が重なった場合は、翌火曜日も休所